
エレベーター

藤原あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エレベーター

【Nコード】

N1875P

【作者名】

藤原あきら

【あらすじ】

仕事に疲れた男が乗り込んだエレベーター。

それは不思議なエレベーターだった……。

エレベーターの扉が開いた。

私は目を疑った。

「あら、いらつしやい。狭い所で悪いけど……ささ、あがって

……あ、はい。お邪魔します」

私は靴を脱いでエレベーターに乗った。

エレベーターの床が畳だったからだ。

「何階？」

「……あ、10階です」

年は50代くらいだろうか。

その女性は慣れた手つきで10階のボタンを押した。

「ささ、座つて。お茶いれるからね」

エレベーターの中心には卓袱台が鎮座している。

「失礼します……」

私は言われるままに座った。

座ると同時に私の目の前にお茶が置かれる。

「最近、めつきり寒くなって」

女性は自分の分のお茶をすすりながら言った。

「仕事が忙しいんで風邪ひいてる暇なんかないんですけどね、はっ
はっは……」

仕事の事を思い出すと、とたんに気分が沈む……。

仕事で心も身体も疲れきって家に帰っても待つてる家族もない。

それからも目的の10階に着くまで女性と他愛のない世間話をした。

不思議と心が落ち着いている私が出た。

まるで……自分の家に帰って来た様な……そんな安らぎがあった。

チーン

10階に着いた事を告げるベルが鳴った。

「お邪魔しました、とても楽しかったです」

私は何だか離れがたい気もしたが、それでもエレベーターからは降りなきゃいけない。

でも、大丈夫。

明日からも頑張れる、そんな気がした。

「いえいえ、何もお構いできませんで」

「ありがとうございます」

私は女性に深々とお辞儀をした。

エレベーターを降りる。

エレベーターの扉が閉まり始める。

女性が閉まりかけた扉を開けた。

「これ、良かったら。そんな物ばかり食べてちゃ駄目よ」

女性はツッパに入った煮物を私に差し出した。

私の手にはコンビニのレジ袋があったのだ。

私が受け取ると、お礼を言う前に扉が閉まってしまった。

タッパーの中身はまだ温かだった。

(後書き)

拙い作品ですが読んで頂き有り難うございます。
感想などいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1875p/>

エレベーター

2010年12月13日20時32分発行